

戸田御浜環境再生合意形成に向けて

# 合意形成会議の実践

日本の合意形成会議の現状分析とその教訓  
—最近の事例に基づく考察—

専門家の役割と市民の役割

柴山知也

横浜国立大学工学研究院教授

一般市民: 科学的情報固有の不確実性を知っている  
(Bushら, 2001)

データを簡略化した時の不確実性に対する知識がある  
簡略化されたデータのみでなく、  
全ての生のデータを公開する

一般市民は自分達でそれを評価する  
セカンドオピニオンの聴取  
全体の理解が深まる

専門家——社会の関係性の中で科学的結論を紡いでいく。  
科学的分析と合理的選択は別のもの

# 専門家と一般市民とのあり方

先行研究(科学技術社会論)では

欠乏モデル【deficit model】: 公衆理解 = 専門家によって作られる情報の忠実な吸収の度合い

文脈モデル【contextual model】: 専門家の知識・提案を、非専門家個人に内在する体験・知識から評価・解釈

J. Bush【2001】: Keeping the public informed? 他

例) E県

欠乏モデルから  
文脈モデルへ

【県議員】 条件設定WGは3人だが、××WGは1人で不安。

【専門家】 答えが1つしかないところが問題。  
判断を加えたものでないものを提出して欲しい。

【専門家】 データ整理の外注に対して・・・こういうものを作成できる能力のある方はどんどん作って欲しい。

(市民側の科学者の役割)

## 事例の議事録の解析・比較

「公共事業の選択」を議論する場



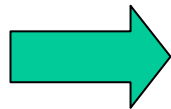
### 協働的相互作用モデル【co-operative model】

合意形成における専門家の役割:

市民の側に立った専門家

専門家とそれ以外が、科学的検討結果のみではなく、その導出プロセスにおいても、協働するシステム

公開された共有のデータを用いて、各々が様々な立場の関心事から結果を推定



対等の立場で比較して、行政側と何が違うのかを討論する

## 科学者が市民側の科学コンサルタントになるために必要な準備

- 第一次社会化(家族)
- 第二次社会化(学校などの集団)
- 職業的社会化(会社などの職能集団)
- 第四の社会化の必要性(地域社会や市民団体) 時間の流れ、組織の構造が違う

# 〈Beder(1991)の五つの終結パターン〉

①関心がなくなることによる終結

②権力を通じた終結

ex. 行政が決定を宣言する。資金がなくなる。

③一致による終結

ex. (公平性、妥当性に関係なく)利害関係が一致する、力を持った専門家の意見に流される。

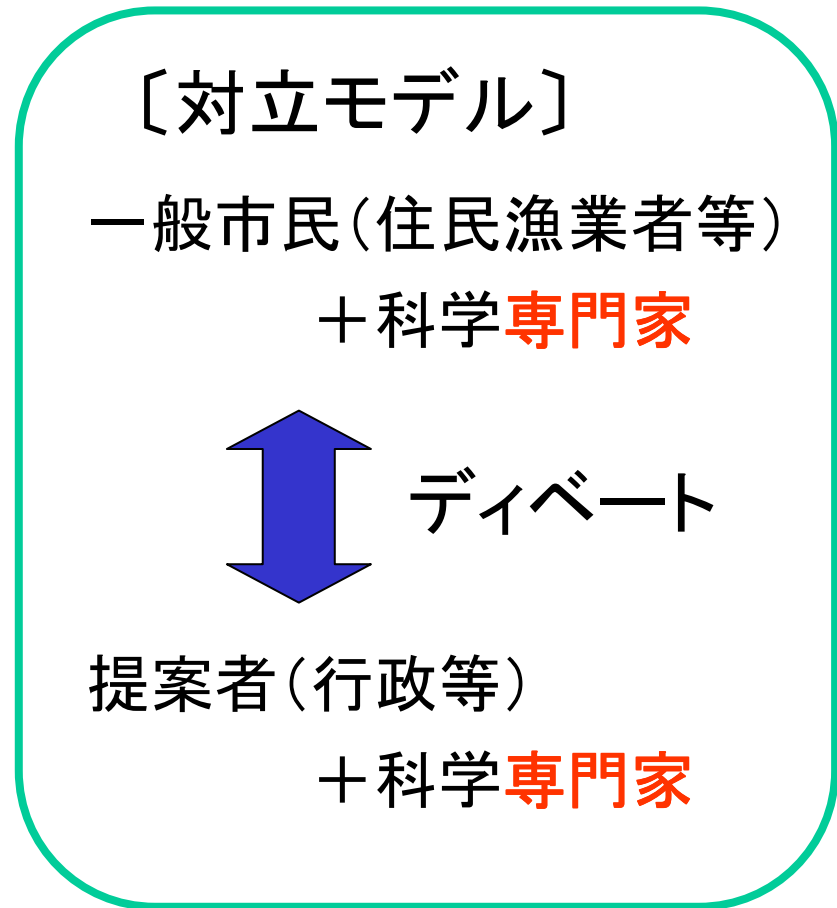
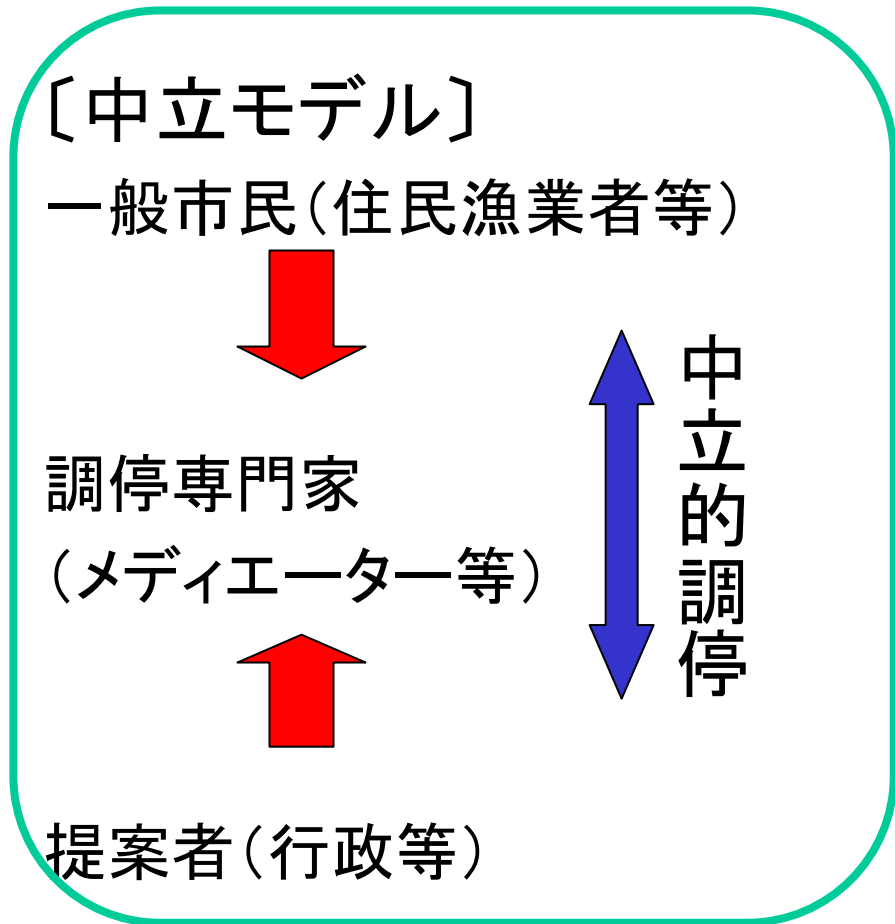
④交渉による終結

ex. 取引を含む交渉を受け入れる。

⑤健全な議論による終結

ex. 参加者が事実に対して賛成でき、ある特定の結論が最も適切であるということに同意する。

# 〈中立モデルと対立モデルの例〉



# 〈分析の方法〉

約4000ページの委員会の議事録から

一般市民と一般市民  
一般市民と専門家  
専門家と専門家

が対立している場面  
を見つけ分析する。

使用する議事録は

- ・A委員会議事録
  - ・B委員会議事録
  - ・C会議議事録
  - ・D協議会議事録
- とする。



- ・一般市民同士の議論では、学術的にも効率的にもなりにくい。(C、D)
- ・一般市民と専門家の議論は、一般市民が専門的な知識を持っていないため、議論に効果的に参加できていない。(A、C)
- ・専門家同士の活発な議論は委員全体の共通認識を深めている。(B)



- ・中立モデルでは健全な議論による終結はもたらされていない。
- ・技術専門家が一般市民をサポートし、ディベートする対立モデルであればこれらの問題は解決される。

# 設問 ( Research Question )

「公共事業の選択」において、専門家の説明・判断と一般市民の認識・判断との間には、何故ズレがあるのか？

# 作業仮説 ( Operation Hypothesis )

専門家と一般市民とが各々有する知識は、量的にも、質的にも異なるが、相互理解は可能である。さらに、「健全な議論による終結」が実現でき、合意の形成が可能である。

# 解析の方法論

マイクロエスノグラフィーの方法

箕浦・柴山  
【1999】

出来事が生起する現場

→人々の自然な行動を文脈ごとに記録  
(例えば本研究では、議事録をテキストとして使用)

→人々の営みや世界を理解する方法

# 理論的背景

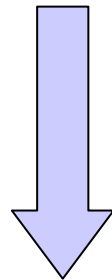
- (1) 西欧で実証されている社会心理学的現象の多くは、東洋で非常に異なった形態をとる
- (2) 文化間の差異は各文化に共有される暗黙の自己観を反映している

欧米;「相互独立的自己観」

自己は他者や状況と切り離された独立した存在

日本;「相互協調的自己観」

自己は他者との関係性や状況と本質的に結びついた存在



北山(1994)

欧米の事例により定義された枠組みを、日本の事例にそのまま適用することはできない

# 理論的背景

箕浦・柴山  
【1999】

## 質的分析

統計的手法を用いた量的分析では捉えられない側面を照らし出し、**発話に埋め込まれた意味のやりとりを深く理解する。**

## 解釈論的アプローチ

個人の行動とその背後にある意味との連関を解釈し、**人間行動を理解する。**

# 解析の流れ

解析データ: 議事録

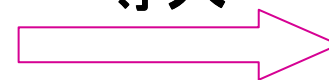
A4版6000ページ

1. A委員会(議事録)
2. C会議(議事録、傍聴)
3. E委員会(議事録)
4. F協議会(議事録)
5. J委員会(委員として参加)

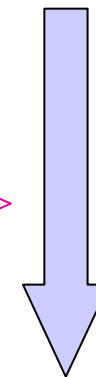
## 解析枠組み

- 公衆理解のモデル(石垣、2002)
- 論争の終結パターン( Beder、1991)

導入



解析



「健全な議論による終結」を果たすための条件の明確化

# 科学の公衆理解のモデル

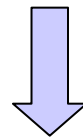
- 欠乏モデル【deficit model】:

公衆理解＝専門家によって作られる情報の忠実な吸収の度合い

- 文脈モデル【contextual model】:

専門家の知識・提案を、一般市民に内在する体験・知識から評価・解釈

Bushら【2001】



- 協働的相互作用モデル【co-operative model】

専門家と一般市民とが、科学的検討結果のみではなく、その  
導出プロセスにおいても、協働するシステム 柴山ら【2003】

## 協働的相互作用モデル(柴山ら、2003)の適用マニュアル

- **テーマ**: 既存案の評価ではなく、具体案の新たな提案ができるような問いの立て方
- **人選**: 意識レベルが高い、様々な立場の委員の採用  
特定の分野で代替案が作成できうる委員の採用
- **専門家**: わかりやすい言葉の使用  
個人に内在する知識への積極的な対応
- **一般市民**: 利害のみでなく、立場の相対化を図る必要あり  
勉強し、知識レベルの向上を図る必要あり
- **行政などの提案者**: データの公開  
的確な調査と、質問への明確な回答  
知識レベルの向上を図る機会の設定



柔軟な案・可逆性のある案・実験的な施策

「総意による終結」ではなく → 意思決定

意思決定後の判断基準の事前設定が必要

- 「修辞による終結」
- 「交渉による終結」

- 専門家側の都合の良い判断への警戒
- 答申等のまとめの中に約束事などを記載し担保

評価指標・項目などの判断基準に関する共通認識の形成

案の実行

「権力による終結」「誘導による終結」への警戒

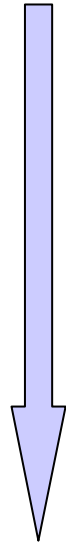
事後評価・監視（協働モデルによる）

「関心の喪失による終結」を回避

「健全な議論による終結」の実現

# 結論 ①

## 住民参加型協議会の分析

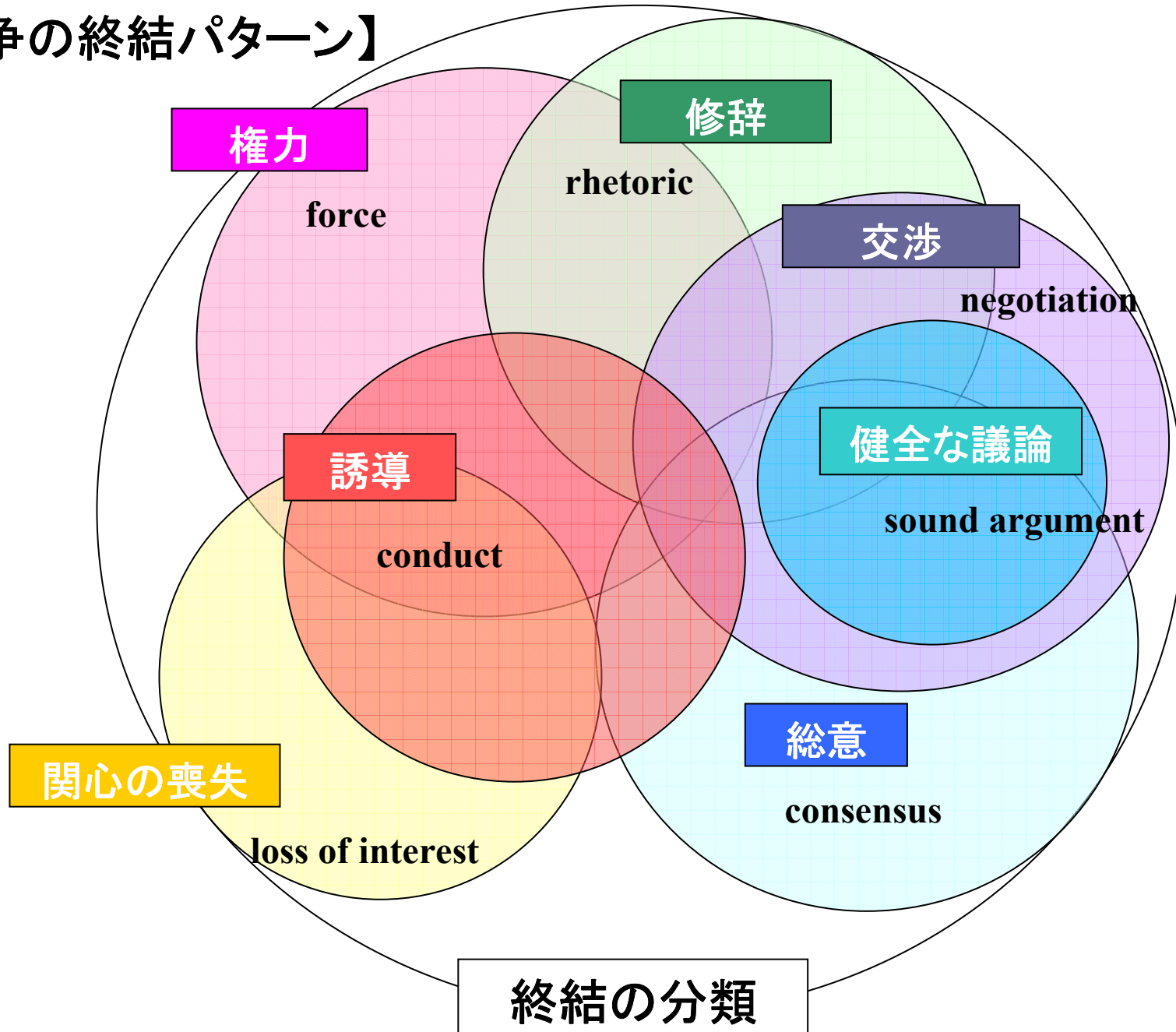


- 論争の終結パターン分類 (Beder【1991】)
  - 説明力が高い
- 欠乏モデルには限界 (科学技術社会論)
  - 欠乏モデルが根強く支配
  - 該当の終結パターンなし

### 誘導による終結 (Closure through Conduct)

既に用意されている結論の正当性を理解させるために都合の良いデータや資料を提供し、誘導することで図られる終結

# 【論争の終結パターン】



# 結論 ②

## 「健全な議論による終結」実現への条件

- ・ 協働的相互作用モデル(柴山ら、2003)の適用は有効。
- ・ Beder(1991)の定義では否定的に捉えられていた「修辞による終結」を図るプロセスは「健全な議論による終結」への手段として有効。
- ・ 専門家の積極的な見解の表明が必要。ただし、「誘導」は不可。
- ・ 多様な利害関係者が参加している場合、「総意による終結」は困難であるため、「意思決定」や「交渉」によって妥協点を探り、議論することも必要な場合あり。

# 「沿岸域における合意形成」

## 1. 達成すべき価値

誰にとっての価値か？ 自律的管理による価値創造

## 2. 合意形成の過程

協働的過程をどう設計するか？

考え方の枠組みや方法は揃いつつある

健全な議論による終結 協働的相互作用モデル 対立モデル

広範な議論の基盤 データの公開 XML(標準化)

CRANES 議論の構造分析と支援

住民からの代替案 地元の意志とその系譜

設計の自由度は高い 社会関係の組み替え 利用者の立場

からの価値向上 標準化による負担の軽減 データ使用の合

意形成 データに基づいたイメージの記述 良い案を作るため

の議論過程 議論の後の意志決定 手続き制度の設計 合意

形成は永続的